

【旧約聖書日課】イザヤ書 11章1～10節

- 1 エッサイの株からひとつの芽が萌えいで  
その根からひとつの若枝が育ち
- 2 その上に主の霊がとどまる。  
知恵と識別の霊  
思慮と勇気の霊  
主を知り、恐れ敬う霊。
- 3 彼は主を恐れ敬う霊に満たされる。  
目に見えるところによって裁きを行わず  
耳にするところによって弁護することはない。
- 4 弱い人のために正当な裁きを行い  
この地の貧しい人を公平に弁護する。  
その口の鞭をもって地を打ち  
唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。
- 5 正義をその腰の帯とし  
真実をその身に帯びる。
- 6 狼は小羊と共に宿り  
豹は子山羊と共に伏す。  
子牛は若獅子と共に育ち  
小さい子供がそれらを導く。
- 7 牛も熊も共に草をはみ  
その子らは共に伏し  
獅子も牛もひとしく干し草を食らう。
- 8 乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ  
幼子は蝮の巣に手を入れる。
- 9 わたしの聖なる山においては  
何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。  
水が海を覆っているように  
大地は主を知る知識で満たされる。
- 10 その日が来れば  
エッサイの根はすべての民の旗印として立てられ  
国々はそれを求めて集う。  
そのとどまる場所は栄光に輝く。

【福音書日課】マタイによる福音書 2章1～12節

<sup>1</sup>イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、<sup>2</sup>言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」<sup>3</sup>これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。<sup>4</sup>王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただし

た。<sup>5</sup>彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

<sup>6</sup>『ユダの地、ベツレヘムよ、  
お前はユダの指導者たちの中で  
決していちばん小さいものではない。  
お前から指導者が現れ、  
わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」

<sup>7</sup>そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。<sup>8</sup>そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。<sup>9</sup>彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。<sup>10</sup>学者たちはその星を見て喜びにあふれた。<sup>11</sup>家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。<sup>12</sup>ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

## 星に導かれて【こども説教のために】

教会は、先週、御子のご降誕を祝いました。わたしたちの祝いの礼拝にも、多くの人が集められました。久しぶりに礼拝堂があふれるほどになりました。皆で祝いの喜びを分かち合えることは、本当にうれしいことです。

けれども、その大勢の中にいらっしゃらない方もいたのです。どの祝いの礼拝にもおいでになられなかった方がいらっしゃいます。ほかの教会の祝いに行かれたのでしょうか。それとも、どこの祝いにも加わらずにいらしたのでしょうか。そのような人が、今からでもご降誕の祝いに導かれてほしいと、心から願います。教会は、今日もまだ、ご降誕の祝いの中にあるのです。

御子がお生まれになられたとき、宿屋に泊まるどころがなかった御子の両親は、生まれてきた幼子を飼い葉桶に寝かせました（ルカ 2:7）。その飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当て（同 2:16）て、ご降誕の祝いをすることができたのは、夜通し羊の群れの番をしていた羊飼いたちでした。彼らは、クリスマスの天使の告げてくれた知らせを聞いて、誰よりも早く、御子のご降誕を祝うことができたのです。

羊飼いたちよりも遅れて、お生まれになられた幼子を祝いにやって来た者たちがありました。**東の方から来た占星術の学者たち**です。彼らは、星に導かれてきました。**幼子のいる場所**へと導いてくれる不思議な星です。星に導かれて来た学者らは、その家に入り、母マリアと共にいる幼子を見つけ、ひれ伏して拝みました。羊飼いたちに遅れて、ご降誕の祝いをしたのです。

その星は、「ベツレヘムの星」と呼ばれるようになりました。わたしたちのことも導いてくれる星です。クリスマスの祝いに遅れたすべての人のために、この星が現れて、御子ご降誕の家へと導いてくれることでしょう。

## そのお方はどこに？

何年かごとに巡ってくる、日曜日に始まり日曜日に終わる一年が閉じようとしています。主日の礼拝で始めた年を、主日の礼拝で終えるのです。わたしは、この巡り年を特別な「恵みの年」だと思っています。石神井教会では、元旦礼拝をしておらず、大晦日の特別な礼拝の習慣もないからです。わたしたちの歩みの節目となる初めと終わりが、御子を礼拝する営みに充てられることは、他の何を置いても貴いことに他ならないでしょう。

主イエスは、「わたしはアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり、終わりである」(黙示録 22:13) と告げられたお方です。使徒たちの教会は、そう証しました。わたしたちの初めと終わりをしるしづけるお方です。何かを始めるとき、そして、何かを終えるとき、わたしたちは、このお方、主イエス・キリストと共にそうする。それが、主イエスに従う道を歩み始めた者の、大原則として教えられてきたのです。

だからなのでしょう、古代教会の人々は、主のご降誕の祝いを、この世の暦で年が改まるときに定めてきました。この世界に生きる者として、しかし、この世界の何者かに従うのではなく、神の御子であるお方に従って、新しい一年を歩み始め、歩み続け、歩み抜くのです。幼子としておいでくださるお方は、そのわたしたちの歩みを、まさに人として、幼子から始まる人として、先立ち、共に歩んでくださるのです。

そうであればこそ、このご降誕の祝いの期節、新しい「主の年」を迎えるこのときに、そのお方がどこにおいでなのか、わたしたちは、立ちどまって確かめずにいられないのでしょう。

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」。学者たちの問いに、祭司たちや律法学者たちは、預言者の言葉をもって答えることができました、「ユダの地、ベツレヘムよ」と。確かに、「聖書」は、わたしたちが尋ね求めるお方を指し示してくれるでしょう。けれども、祭司たちや律法学者たちは、そのお方を見出すことはありませんでした。学者たちのように出かけていくことをしなかったからです。幼子のいる場所を探し当て、その家に入り、母と共にいる幼子を見つけ出すこと。それは、事実そうしようとした者だけがたどり着けることなのです。

主の日の営みから始め、主の日の営みで終える一年を閉じ、新しい「主の年」を迎えようとしています。たとえ新しい「主の年」が、主の日の営みから始められないとしても、御子をひれ伏し拝む教会の集まりから始められないとしても、わたしたちは、御子を尋ね求めることから始めることができるでしょう。何となれば、わたしたちは皆、すでに御子のご降誕を祝う者とさされているからです。御子は、新しい年の初めと終わりに、おいでなのです。

## 根から若枝が育つ

礼拝の初めに「エッサイの根より」(『讚美歌 21』248 番)を歌いました。旧約聖書日課(イザヤ書 11 章)などに基づくクリスマスの歌です。「エッサイの根より生いいでたる、預言によりて伝えられし、ばらは咲きぬ」と歌われますが、元になったイザヤ書の御言葉は少し違います。「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち」と告げるのです。「芽が出る」「若枝が育つ」と言われており、「バラ」つまり「花が咲く」とは言われていません。けれども、讚美歌作者は、そこに「バラが咲く」様子を思い浮かべたのでしょう。

おそらくこの預言者の言葉に基づいてだと思われませんが、「ヨハネの黙示録」は、主イエスご自身が「わたしは、ダビデのひこばえ、その一族、明けの明星である」(黙 22:16)とお告げになられていると記しています。預言者が描いている「芽」や「若枝」は、「ひこばえ」なのです。

「ひこばえ」は、樹木の根元や切り株から生え出てくる若芽、新芽のことです。たいていは春から初夏にかけて芽吹いてきます。大きな幹の根元にも生えてきますが、倒木の根元や切り株からも生えてきます。そこから、その木は新しく再生することができるのです。

前任地教会の隣町にあった古い神社で、樹齢 1000 年を超えと言われていた大銀杏の木が強風で根元から倒れるということがありました。当初、再生は無理だろうと言われていましたが、まもなく生え出てきた「ひこばえ」を元にして、今はすでに立派な銀杏の木が回復しています。その経緯は、逐次報道もされていましたが、最初はうまくいかなかったようです。「ひこばえ」を切って「苗」のように植樹していたため、なかなか根付かなかったのです。本当は、「ひこばえ」は生えてきた根にそのまま残しておけば、自然にそこから新しい幹が育つのです。ただし、古い根はその過程で枯れ腐って土に還ってしまいます。

使徒たちの教会は、主イエスを「ダビデのひこばえ」と呼びました。ダビデの父が「エッサイ」です。その「エッサイの木」は倒れてしまったのです。倒れてしまったので、「株から…芽が萌えいで、その根から…若枝が育ち」と言われるのです。新しいものが生え出でるとき、古いものは倒れ、腐れ、新しいものの命のうちに吸収されていく。預言者は、そう言っているのです。

「ひこばえ」を見つけても、古い木を温存しようとして、切り離してしまったならば、うまく育たないでしょう。しかし、古い木は倒れ、土に還されればよいのです。そこに「ひこばえ」が見いだされるならば、新しい枝がまっすぐ伸びることになるでしょう。「ひこばえ」は、確かに萌えいでいるのです。小さな芽を、「幼子」として、わたしたちはすでに見出しています。